

# 悠久の京を訪ねて Part IV Vol.7



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

## 古代寺院の瓦窯 一八幡市美濃山瓦窯跡群一

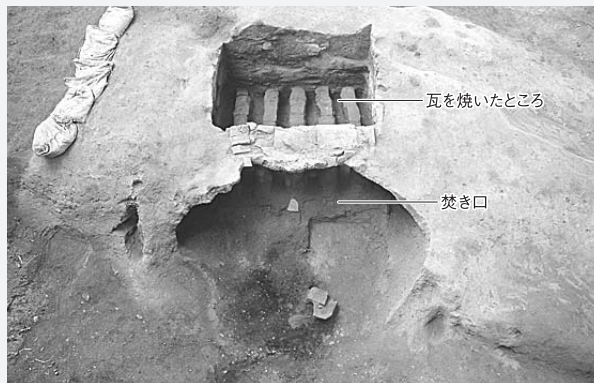
美濃山瓦窯跡群



### ■ 窖窯から平窯へ

八幡市美濃山瓦窯跡群は、八幡市と京田辺市の境近くの丘陵部に位置します。平成23～24年度の発掘調査で、8世紀初頭から9世紀前半頃までの瓦窯が5基見つかりました。

そのうち2基は、ゆるやかな斜面にトンネルを掘った窖窯で、残りの3基は平窯です。時期は窖窯のほうが古く、8世紀後半頃に平窯へと窯の構造は変化しました。これにより、燃料の薪が最小限に抑えられ、焼きむらも少なくなり、効率的に大量の瓦を生産できるようになったと考えられます。



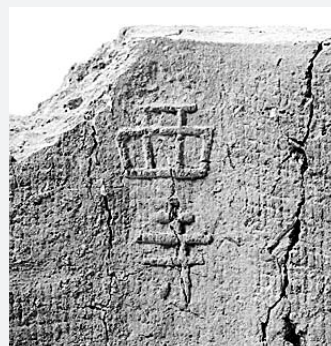
見つかった平窯（9世紀）

### ■ 瓦の供給先の変化

瓦窯跡群は、美濃山廃寺の瓦を焼くために造られた窯ですが、奈良時代後半には美濃山廃寺だけでなく、八幡市志水廃寺など近くの寺院にも瓦を供給していたことが明らかとなりました。供給先の不明な瓦も生産していることから複数の寺院などに瓦を供給していたと思われます。

また、平安時代の窯の部材に「西寺」と押印された文字瓦が使われていました。この文字瓦は美濃山瓦窯で焼かれたものかどうかは確かではありません。しかし、同じ文字瓦が平安京の西寺跡で出土していることから、何らかの関わりがあったのでしょう。

このように、美濃山瓦窯跡群では、一寺院の瓦を生産した窯跡群から複数の供給先をもつ窯跡群へと変貌したことが具体的に分かり、古代山城地域の瓦の生産や供給のあり方を考える上で貴重な資料となりました。



「西寺」文字瓦